

記録

年頭初歩きの記

幹事 羽柴 弘

昭和四十七年一月二日、うららかな初春日和である。天候はまじめが史談会恒例の初歩きに味方してくれ、佐伯史談一七十九号、十二月発行の時点で、野津探検会の来訪を迎え、合同研修会をもつ予定であったので、コースを城山中心とした。(事情があつて野津の来訪は変更)

午前九時、三ヶ丘の石垣の下に集合した。その彌ふは高木会長、岩田海、平川、弥生、伊原、五十川、青山から大原、徳矢、小崎、陰西、遠く国東へ武蔵部から湯郷中の前池又人とその娘さん、それに清田、科紫、藤田、古松(おやけも教松屋)と、以上十四名。まあまあ集合である。

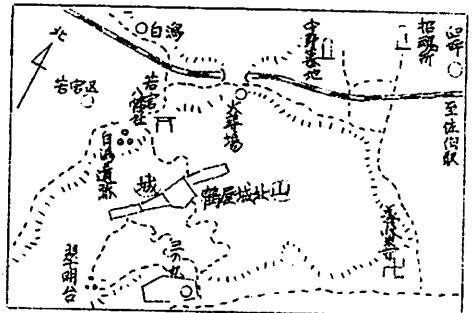
先ず異門とくかり、野村先生の胸像の前になつた。先生は佐伯小学校の教師とつとめられ、広く佐伯の青少年の体育指導に當られて、その薫陶を受けて育ったものが多く、散れ子左氏が師の在りし日の姿を慕つて、ここに胸像を建設したのである。製作者は故片岡百太郎。

壮大な自聖の文代会館、私も左半からぐるりとめぐり、落葉一皮いで汚れている泉水のほとりから上段に上つた。

毛利高政が朝鮮から持ち帰ったと伝えられている高麗楳、その下に建つていた石ノ楳楳は誰の仕業か、おん楳楳の木ノ根元は建てるにしている。いか減なものである。記念樹もこんな所に植えたかどうか。さらに高野楳を果して朝鮮から持ち帰つたかどうか。すべて誰かのいい加減な創作ではないかと思う。

一回はそれから聖明台の上り、林間小道を辿りまっ直ぐは西の丸を目指す。勾配はかなり急ではあるが左右の樹林の送迎がたのしく、わつくりわつくり登つた。

西の丸から八段望はいつもながらよい。眼下の香正の流石、鶴岡方面の住宅地帯、そして遠くはるか天空にそびえる格山や米格山。



二ヶ丘から左丸、そして天守台、振り返つて見ると柔石の佇み、つゞある佐伯市街、臨海工業地帯の向うには佐伯湾が島々と浮かべて静かに広がっている。

この鶴岡城、小なりといえども城の徒張布直とのい、今こそ橋一つも残らぬが、三百年の星霜を経て尚ビクともしなない石垣、立派なキルであると思う。古城の跡に立ち佐伯湾の島々を指顧するのは、新春の何よりの見ものである。

天守台をバックに一回記念写真をとつた後、今度は北の丸から北に下り、水の手にある雄淵、雄淵を見て、白鳥の八橋楳を目標として下る。少しゴゴロ道がつづくがすぐ八橋楳の森に達する。

先には白鳥道跡を見学する。幸い今日日籍方官司がいらして理場説明をして下さり、神社界段に格納している出土品も特見する。新年早々まことによい寺古堂の勉強になつたわけである。

秋は口うちつれて一回拝殿の上つた。そして修葺まつけ、諸方官司が史談会活動の祝詞奏上のち、代表高木会長、正事務長に合せて一回拝礼、そして御神酒をいただく。清浄、清新のこころに包まれて退出した。

一回は神域を出て鉄道線沿で、大葬場の横に出る小正峠と越し中野に出る。この道は田水田独歩が好んで巡つた散歩道である。

まっ直ぐは岡ノ谷の掘堀所はゆく、まず皆の目に入つたのは入口左の石打壘、昨年秋の台風でまを杉が倒れて、折角史談会がつくつた火屋から、巨大な壘までを打ち砕いて、見るも無残な姿となつている。

正面の「歌板の碑」はまわりの石垣も、大半倒れて石柱が打ちこぼれている。灰石(凝灰岩)とセメント、石工、左官、工費数万円——といふいふが頭の中をかきめぐる。

この墓地には、豊日国境地帯の西南戦争で陣没した官軍の将兵と警察官百数人が眠っている。佐伯市への史跡の一つである。以前は楳が多く毎年四月ともなると万葉の楳を賣する所の人達が押しかけたもの、まそうなが、今日は老朽した楳が己んの二三本しかない。古野楳でもよい、何とか方法を構いて、数十本植込みたいものである。

時計は十二時に近くなつた。今日は半日の予定で弁当も持っていない。ここで今日の初歩きのコースを終了、皆テクノと歩いて帰つた。

白鳥の額代のおとは埋立てて白鳥の声を絶えたり
改修で埋まつかその川の支流に降り
あま左佐反く
天田 慧 声